

道徳性の発達の違いと体育授業中の学習行動との関係 — 小学校ボールゲームの授業を対象として —

本学教育学部	林 修
田辺市立田辺第三小学校	塩路 文哉
田辺市立田辺第二小学校	松葉 貴士
海南市立内海小学校	南 拓哉
海南市立下津小学校	熊代 悟志
本学附属小学校	中山 和幸・原田 宗樹・谷口 周平
本学 4 年生	井場木才紀・仙波 拓

I はじめに

体育は身体教育である。つまり、生涯に亘る私の身体を育てていくところにその教育的価値を有している。学習指導要領の体育科の目標には、「心と体を一体としてとらえ」と明示されていることから、今日の子どもたちの身体を育てていくことは教育の根本的な課題であるといえよう。

ところで、文部科学省が公表している暴力行為の発生件数をみると、小学校の場合、2012年には約8,200件だったものが2022年には約61,000件と約7.5倍に激増している。これは小学校教育現場が崩壊しているのではないかとさえ危惧される大問題である。

本報告では、こうした現状を踏まえ、子どもたちの道徳性発達が異なれば学習者行動も異なるのかについて体育の授業（ボールゲーム）を例にして、実践的に検討することを目的とした。

II 資料の収集

1. 対象

今回の実践にあたっては、依頼した際に内容を説明し、了解を得られた小学校の第5学年2学級を対象とした。

2. 調査時期

令和5年11月上旬～12月上旬

3. 教材

著者らが作成したバスケットボールの学習過程(全9時間)により実践していただいた。

4. 資料の収集

(1) 審判の判定をめぐる葛藤価値検査による道徳性発達の変容

単元前後には審判の判定をめぐる葛藤価値検査（伊勢：2000）を実施し、児童の道徳性の段階の違いを把握した。この時、単元前の診断において道徳性発達が4段階中で最も高い「excellent」もしくは「第3段階」に位置づいた児童の中から、担任教師との相談により3名を抽出した（以下、高位群と呼ぶ）。続いて、4段階中で最も低い段階の「第1段階」に位置づいた児童の中から同様の手順で3名を抽出した（以下、低位群と呼ぶ）。

なお、上述した高位群、低位群という呼び方については、対象が5年生であり、今後さらに発達を遂げる段階であること、今回用いた一つの方法によって分類されたものであることから、便宜的に使用していることを理解いただきたい。

(2) ALT=PEによる授業中の学習者行動の把握

先行研究で用いられたALT-PE観察法（鈴木ら：1986）により、単元期間中の2、5、8時間目における抽出児の学習行動を量的に把握・分析した。

(3) チームごとの話し合い活動にみる児童の発言内容の把握

単元期間中の 2、5、8 時間目のチームごとの話し合い活動を VTR に収録し、児童の発言内容から学習行動の具体を把握した。

Ⅲ 実践から得られた主な結果と考察

1. 葛藤価値検査の変容

表 1 は、単元前後における児童全員の道徳性発達段階を示したものである。

最高段階である「excellent」と続く「第 3 段階」の人数が若干多くなったものの、大きな変化は認められなかった。

2. ALT-PE からみた学習者行動の違い

表 2 は、道徳性発達段階の異なる児童の ALT-PE 値の平均を示したものである。

ALT-PE 値は、高位群で 76.5%、低位群で 72.2% となり、両者の間に差異は認められなかった。

このことは、授業中の学習者行動に対して、道徳性の発達段階の違いの影響を受けることは少ないということの意味するものである。

では、道徳性の発達段階の違いは学習者行動の違いとして現れないのであろうか。

そこで、次に児童の学習行動を質的に検討してみることにした。

3. 発言内容からみた学習者行動の違い

図 1 は、撮影した VTR から取り出された上位群と下位群それぞれの児童の発言内容を表 3 に示した分類に基づいてその比率を示したものである。

品詞ごとに分類して示したものである。

いずれの品詞においても、主体的発言の比率は高位群の方が、逆に非主体的発言のそれは低位群の方が多結果であった。とりわけ、副詞、形容動詞、形容詞の 3 つの品詞においてその傾向が顕著であった。

表 4 は、上記 5 つの品詞の内部事項である具体的な言葉の使用頻度のうち、高位群と低位群で差異が大きかった品詞を上位から順に 5 つ取り出したものである。

以下、それぞれの品詞の頻度と実際の VTR からとらえた児童の姿から検討する。

(1) 名詞について

高位群からは、低位群に比べてパス「名前」「シュート」「みんな」「相手」などの言葉

表 1 道徳性発達段階人数 (人)

段 階	単元前	単元後
excellent	2	3
第 3 段階	6	8
第 2 段階	1 3	1 1
第 1 段階	1 8	1 8
合 計	3 9	4 0

表 2 低位群と高位群の ALT - PE 値の平均 (%)

Categories	低位群	高位群
体育的内容	80.0	82.3
単発的技能	8.4	7.7
連発的技能	8.4	7.2
競争	21.8	21.2
体力づくり	2.1	2.1
知識の発達	40.8	44.0
社会的発達	0.0	0.0
その他の運動活動	0.0	0.0
児童の取り組み	72.8	76.8
○適切な運動での反応	17.7	21.2
○運動での従事	12.6	9.6
○間接的活動	37.1	36.5
○認知的活動	5.4	9.5
児童が取り組んでいない	7.1	5.5
△合い間	1.4	1.3
△待機	5.3	2.4
△課題からはずれている	0.4	1.8
容易に成功	66.3	74.4
多少の難はあるが成功	5.9	2.1
児童の成功 (ALT -PE)	72.2	76.5
大きな困難を伴う失敗	0.4	0.3

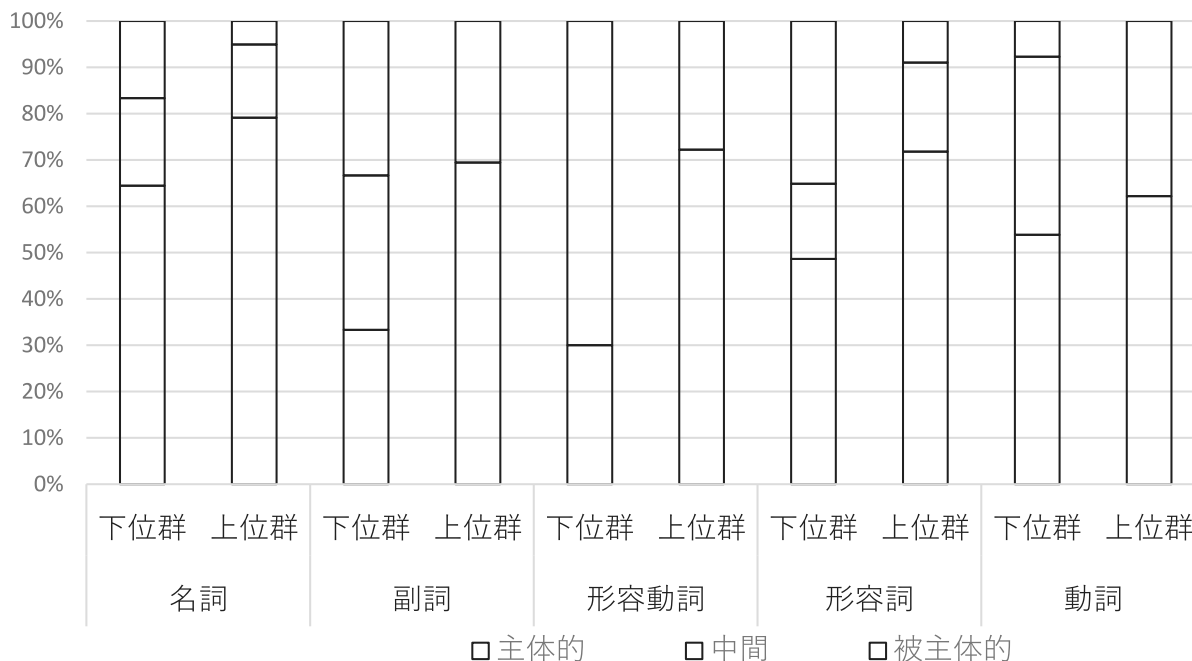


図 1 道徳性発達段階の違いにみる児童の発言（品詞）の違い

表 3 児童の発言（品詞）の分類

	主体的	非主体的
名詞	・作戦・ボール・パス・シュート ・自分たち・みんな・全員・チャンス など	・ファール・血 など
副詞	・めっちゃ・結構・すぐ・いっぱい ・もう少し など	・下手・ぱっかり・全然・何も など
形容動詞	・大丈夫・得意・完璧 など	・だめ・無理・勝手・最低 など
形容詞	・うまい・良い・しょうがない・楽しい ・すごい など	・難しい・きつい・しにくい・怖い ・悪い・しんどい など
動詞	・できる・する・頑張る・動く・わかる ・うまくいく・集中する・切り替える ・つながる・夢中になる・気をつける など	・疲れる・焦る・負ける・こんがらがる ・無視する・押される・殺す・死ぬ ・ぶつかる など

表 4 道徳性発達段階の異なる児童から得られた発言内容

品詞	1	2	3	4	5
名詞	パス	名前	シュート	みんな	相手
副詞	めっちゃ	結構	いっぱい	もう少し	前に
形容動詞	大丈夫	完璧	下手	ダメ	無理
形容詞	良い	うまい	難しい	高い	速い
動詞	できる	する	頑張る	取る	なる

※塗りつぶしの品詞は、低位群の方に多く認められたものを、それ以外は高位群に多く認められたものとそれぞれ示したものである。

が多く取り出された。

授業の VTR の観察から、高位群の児童は、ゲームや練習中に仲間の名前を読んでパスやシュートといったプレイを遂行しようとする場面が取り出された。さらに「みんな」「相手」など、味方や相手チームを意識した発言みられた。

(2)副詞について

高位群からは、「めっちゃ」「結構」「いっぱい」「もう少し」「前に」といった言葉が多く取り出された。

先と同様に VTR から、高位群の児童はこれらの言葉に続いて、「めっちゃいい」「もう少しでできるよ」など、仲間の動きを賞賛したり、励ましたりする場面が認められた。

(3)形容動詞について

高位群からは「大丈夫」という言葉が、逆に低位群の児童からは「下手」「だめ」「無理」などの言葉が多く取り出された。

VTR から、高位群の児童は、うまくできなかった仲間に対して「大丈夫」という声をかけており、励ます場面が取り出された。しかし、低位群からは、「目は下手だから」「できない、だめ」「無理だよ」など、自身がうまくできなかったときにあきらめたり、投げやりになったりする場面が取り出されてしまった。

(4)形容詞について

高位群からは、「よい」「うまい」などの言葉が多く取り出された。逆に副詞の場合と同様に、低位群からは「難しい」といった非主体的な言葉が多く取り出された。

VTR から、チームの仲間が上手にできた場面を捉えて「いいよ、よかった」とか「○○君、うまい」など、仲間のプレイを賞賛する場面が取り出された。

(5)動詞について

高位群からは、「できる」「する」「頑張る」などの言葉が多く取り出された。

VTR から、自分の動きや仲間の動きを言葉として表し、作戦を遂行するために発言している場面が取り出された。

IV まとめ

今回の取り組みでは、道徳性の発達段階からみて高位群と低位群の児童を抽出し、授業中の学習者行動の違いを把握した。

その結果、授業中の抽出児童の ALT-PE 値は、道徳性の発達段階の違いの影響は認められなかった。しかしながら、具体的な発言内容には差異が認められた。すなわち、高位群の児童は、仲間の失敗を認めたり励ましたりするとともに、円滑に作戦遂行するために仲間へ指示を出したり、うまくできたときに賞賛するといった学習行動が特徴的に認められた。これに対して、低位群の児童は、自分自身のプレイに自信がなく、プレイが容易でないとあきらめてしまう傾向のあることが特徴として認められた。

今後は、こうした児童の発達上の特性の違いを踏まえながら、それぞれの児童が発達を自己開示できるような授業づくり、教師の指導の在り方について実践的に検討していく必要がある。今後の課題としたい。

(参考文献)

- 1) 伊勢優子 (2000)「体育における葛藤価値検査作成の試み—理由づけ分析による診断基準の妥当性の検討—」 鳴門教育大学卒業論文。
- 2) 鈴木宰・梅野圭史、辻野昭 (1985)「ALT-PE システムを用いた体育科の授業分析に関する研究」, スポーツ教育学研究, 4-2:59-70.